

---

# 雪の中・・・

‡ L ‡

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

雪の中・・・

### 【コード】

N2166B

### 【作者名】

ナナナ

### 【あらすじ】

これは僕と彼女の失恋物語である。一年半の付き合いで・・・

『うわあ・・・雪だ。』

僕は目が覚めた。雪の降る日の事だった。いつもの様に並木道を歩いていた。少し歩くと、今付き合っている彼女がベンチで座っていた。

『ゴメン。待った？』

僕は言った。すると彼女は、

『ううん、今来たところ。』　そう言ったので、僕らは二人手を繋ぎ歩いていった。付き合ってから1年半の僕らに恋の進展がまったく無かった。付き合ってからずっと一緒に歩いて学校に行き帰りする位で、僕はそれ以外全然、何もしてやれていなかった。

学校が終わって帰る時、彼女は僕の所によって来る。いつも一緒に帰っているからだ。そしていつも通り帰っていると、彼女は僕に、

『なんで、何もしてくれないの？一緒に帰るだけじゃなくて、他にもなんか・・・』

と、言ってきた。あまりにも急だったので、悲しい気分になってしまい言葉が出なくなった。でも僕は、

『じゃあ、どんなことしてほしいの？』

と、優しく問いかけた。すると彼女はいきなり僕に抱きついてきた。僕はバランスがとれず二人とも転んでしまった。

『こんなこと！』

彼女は笑いながら言った。でも手がふるえていた。かなり緊張が有ったのだろうか。僕の方から優しく抱いても、なにも嫌がらずただ身をゆだねていた。内気な彼女がココまで甘えてくるとは、なにか狂ってると思ったが、その心配はなくその後、彼女は僕から離れて、

『やっぱり別れよ。合わないわよ私達。』

そう言って一人帰って行ってしまった。僕は追わなかった。このまま消えてゆく彼女の姿を、ただずっと見ていた。

『雪か、こんなときに。』　そして彼女の姿が見えなくなり、僕は空を見て、再び雪の降る並木道をしずかに去った。。。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2166b/>

---

雪の中・・・

2010年12月15日07時45分発行